

『伝統工芸にみる「両利きの経営』

— 飛騨春慶塗師 熊崎 信行 氏の「深化」と「探索」

長く続けて、
守つていくためには、
いろいろなものにチャレンジせんと。
な。



The Traditional Crafts of GIFU

飛騨高山で400年以上の歴史を持つ国指定伝統的工芸品の「飛騨春慶」。その最大の特徴は、木目の美しさを生かした「透漆」の技法にあります。今回は、この道49年の飛騨春慶塗師であり、「飛騨高山の名匠」にも認定された熊崎信行氏に、職人としての歩み、伝統との向き合い方、そして、新たな挑戦についてお話を伺いました。

特別対談

飛驒春慶塗師 伝統工芸士 熊崎 信行氏

◎聞き手 十六総合研究所 代表取締役社長 澤田 大輔

会社員から春慶塗師へ

—— 塗師になられて49年とのことですが、どのようなきっかけで春慶塗師になられたのでしょうか。

◆熊崎氏：私はもともと名古屋や高山で会社勤めをしていました。春慶のことは何もわからない素人やったんです。きっかけは、会社勤めの間に始めたバドミントンでした。そこで、後に義父となる師匠や、その工房の弟子たちと知り合いました。一緒にバドミントンしたり飲み食いしたりしておる間に、師匠とは家族ぐるみの付き合いになって、師匠の長女と結婚することになりました。その後、兄弟子たちから工房に入るよう勧められたりして、25歳で会社を辞めて、義父に師事するこ

とになりました。

—— それでお義父様の跡を継ぐことになったのですね。伝統工芸の世界というと厳しいイメージがありますが、実際はいかがでしたか。

◆熊崎氏：厳しい

修行はなかったね。素人の状態から始めたので、兄弟弟子たちがやっておるのを見て、与えられた

仕事を繰り返しこなしながら少しずつ覚えていました。

ただ、始めたばかりのときは、「下地」という第一段階の仕事ばかりで、「これで本当に食っているんかな」と不安に思ったことはありました。その頃、長男が生まれたばかりやったもんで。でも気づいたら49年経っていました。

慶事にも弔事にも。

暮らしに寄り添う飛驒春慶

—— 飛驒春慶は400年以上の歴史があるそうですが、始まりは何だったのですか？

◆熊崎氏：もともとはお茶の道具やね。初代飛驒国藩主・金森長近の孫に当たる人が金森宗和という茶人で、関西で春慶の茶器を使って、どんどん広めていったそうです。春慶の名前の由来も、茶道具に「飛春慶」という茶つばがあって、その色に似ていたから名づけられたそうです。

—— 熊崎さんが感じる飛驒春慶の魅力とは何でしょうか。

◆熊崎氏：やはり一番の特徴は「透漆」を使っていて、木目がきれいに見えることやね。時間が経つにつれて漆が透けてきて、木の色合いがよりはっきりしてくる、その変化も魅力。それから、春慶塗は実用的です。漆が塗ってあるので、水洗い



十六総合研究所
代表取締役社長 澤田 大輔



飛騨春慶塗師 伝統工芸士 熊崎 信行氏

も大丈夫です。洗って拭いてもらえばきれいになります。

— 使い方に決まり事やお作法のようなものはあるのですか？

◆熊崎氏：いや、それはないです。もう好き好きに。春慶というのは「春の慶び」と書くので、おめでたい席のイメージがあるかもしれないけれど、昔から法事などの仏事でも春慶の重箱やお膳、運び盆をどんどん使っておったんやね。だから、弔い事で使っていただいても失礼にはならんね。そういう意味で、場所やタイミングを選ばずに使えるのも春慶の良いところやね。

守るべきは「技法」。
形は、自由に挑む

— 芸道や武道には、師の教えや基本を「守」り、その型を「破」って応用し、やがて独自の境地へ「離」れる「守破離」という教えがあります。熊崎さんのお仕事ぶりは、まさにこの言葉を体現されているように感じます。伝統的なお盆や重箱だけでなく、弦楽器など、新しいものにも春慶塗を施されていますね。

◆熊崎氏：弦楽器は高山市が実施していた文



飛騨春慶弦楽器／左から ヴァイオリン(ヴェルディ)、ヴァイオリン(ハイドン)、ヴィオラ(アイーダ)、チェロ(ナブッコ)

化芸術祭で製作したものです。ストラディバリウスの産地で有名なイタリア・クレモナ市の世界的名工、リカルド・ベルゴンツィ氏が製作したものに、飛騨春慶連合協同組合の計らいで、塗らせてもらいました。それから、過去最大の受注品は高山市庁舎の貴賓室のテーブルやね。義父と一緒に仕上げました。やっぱり、長く続けて、守っていくためには、いろいろなものにチャレンジせんとな。大切にしているのは、技術、技法みたいなもの。「本物の木で、本物の漆で、なおかつ手塗りで塗っていく」という。それが伝統やね。技法は守る。そのうえで、依頼があったら断らない、というのが、まず信念としてあります。

「春慶で塗ってください」という依頼であれば、自信はなくても、とりあえずやってみる。「やれる」と思って引き受けます。バイオリンであろうが、



高山市庁舎の貴賓室のテーブル(飛騨春慶連合協同組合受注)



対談風景

飛騨春慶塗師 伝統工芸士 熊崎 信行氏（右）、十六総合研究所 代表取締役社長 澤田 大輔（左）
●漆器は奥左から「華筒」、「格子五段重」、「割目大皿」



「本物の手塗り」を支える使い込まれた塗道具



ひょうたんの酒器

チエロであろうが、テーブルであろうが塗るし、塗
れると。

—— 熊崎さんのオリジナル作品は非常に独創的で
す。

◆熊崎氏：こちらは「割目大皿」で、高山市美術展覧会での受賞作品やね。ナタでぱんと割ったそのままの、この木目がいいなと思ったので。こういう溝があるものは、漆がたまるので、そこも一本一本細いはけで全部取っていくんやね。これはその作業がちょっと大変。そちらは「格子五段重」。高山の古い町並みの、建物の格子をイメージして、漆で描いています。

—— (格子五段重の裏を見て)あ、目立たないとこ
ろに線が入っていますね。

◆熊崎氏：そうそう(笑)。これは印というか。一段目には1本線、二段目には2本線、一番下の五段目には5本線がある。そういう風に、遊びながらやっておるよ。

—— こちらは花器ですか？

◆熊崎氏：そうそう。これ、名前は華筒なんやけど。でも花を入れなくても良いと思うね、何を入れても。

—— 作品自体がアートですね。こうした新しいアイデアはどこから生まれるのですか。

◆熊崎氏：アイデアを得るために、春慶に限らず、油絵や彫刻など、いろいろな展示会をよく見に行きます。

【初公開】 次なる挑戦は“育てる”酒器

—— 次に挑戦してみたい作品の構想はありますか？

◆熊崎氏：実は、秋の展示会に出そうと思っていた初公開の作品があります。ひょうたんを使った酒器です。外側は春慶塗ですが、内側が少し違います。これは「エルジー」という金に似た細かい粉を漆に混ぜて塗ってあるんです。それで、



塗りの様子

内側も全部漆で塗ってあります。

—— 内側がきらきらしてとても華やかですね。

◆熊崎氏：春慶は時間が経つと漆が透けてくる。この酒器は使い込むうちに、だんだん内側のきらきら（エルジー）が目立ってきて、きらびやかさが増していくと思います。外側はシックな飴色に、内側は華やかに。その経年変化を二重で楽しんでもらえたらと。冷酒を飲むのに面白いんじゃないかなと思っています。ただ、良い形のひょうたんを材料として手に入れるのが、なかなか難しいですね。

■ 固定観念を捨てれば、 ■ 新しい発想が生まれる

—— 最近は、伝統的なお土産物屋さんだけでなく、木工公社からの受注生産も増えているそうですね。

◆熊崎氏：最近はランプシェードや位牌、学校の室名札、高級リゾートホテルの部屋のオブジェなど、塗るものも広がっています。あとは、工房で海外の方向けに春慶塗の体験教室を開くこともあるね。欧米の人々がよく来るよ。

—— 伝統を守りながらも、非常にオープンですね。

◆熊崎氏：昔は工房に人を入れず、自分の技術を隠すような人もおったけどね。もう僕は全然オープンでいいと思っています。

—— 最後に、新しいことに挑戦するのをためらっている方に、アドバイスをいただけますか。

◆熊崎氏：この年になったから思うことかもしれないけど、「固定観念を捨てる」ことやね。例えば重箱は「料理を入れるもの」と決めつけず、宝石箱にしてもいいし、書類トレーに使ってもいい。お金を入れてもいいし。格子五段重はお札を入れるのにちょうどいいかもしれませんね（笑）。使う側が自由に発想を転換すれば、そこからいろいろな可能性が生まれてくると思う。

—— 伝統の技法を核に持ちながらも、発想は常に柔らかく、新しいものを取り入れていく。熊崎さんの作品の魅力は、その姿勢そのものにあると感じました。本日は貴重なお話をありがとうございました。



割目大皿を持つ熊崎 信行氏

（対談日：2025年10月28日）

取材後記

400年以上の歴史を持つ飛騨春慶。その伝統の重みを背負いながら、熊崎信行氏は「固定観念は捨てる」と、実に軽やかに、しなやかに語ってくださいました。

今回、経済誌である本誌が、なぜ一人の塗師に焦点を当てたのか。それは、熊崎氏の姿勢が、現代の企業経営者に求められる「チャレンジングスピリット」そのものだと感じたからです。

伝統工芸の世界は、ともすれば守りに入りがちです。しかし熊崎氏は、「本物の木、本物の漆、手塗り」という49年間で培った伝統技法を核としながらも、そこに安住しません。「依頼は断らない」とバイオリンやランプシェードを塗り、「割目大皿」や新作の「ひょうたんの酒器」といった、独創的な作品を生み出し続けています。技法を「守」り、徐々に基の型を「破」って応用し、やがて型や教えから「離」れて独自の境地へ——。まさに「守破離」を体現するその姿は、既存事業を深く掘り下げる「深化」と、新たな機会を模索する「探索」を両立させる「両利きの経営」にも通じるものです。

伝統を守るためにこそ、挑戦を続ける。そのしなやかな哲学は、業種や規模の壁を超えて、変化の時代を率いるすべての人たちにとって、大きな勇気と示唆を与えてくれるのではないでしょうか。



熊崎氏の工房にて



【高山市生涯学習課の取り組み】

飛騨春慶弦楽器出前コンサート

音楽に親しむ機会の創出と国の伝統的工芸品に指定される飛騨春慶で製作された弦楽器を広く知ってもらうことを目的に、飛騨春慶弦楽器による出前コンサートを実施しています。



写真提供/
高山市生涯学習課

飛騨春慶弦楽器出前コンサート(演奏／オーケストラ・アンサンブル金沢) 左／莊川さくら学園、右／高山短期大学附属幼稚園

【高山市商工振興課に聞く】

飛騨春慶の「いま」と「未来図」



熊崎氏のような職人個人の弛まぬ挑戦と伝統の技法を守り続ける真摯な姿勢。その両輪が、飛騨春慶の新たな魅力を生み出しています。一方で、伝統工芸を取り巻く環境は決して平坦ではありません。飛騨春慶塗という「産業」全体が直面する課題や、それを支える行政の取り組みについて理解を深めるため、高山市商工振興課にお話を伺いました。

●厳しい現状と、インバウンドという光

日本の伝統的工芸品の市場規模は1983年（生産額約5,400億円）をピークに縮小傾向にあり、2016年には1,000億円を下回りました。飛騨春慶塗も例外ではなく、2016年時点の年商は約2億円で、これは1991年の約5分の1にまで減少しています。それに伴い職人も減少し、1991年に100人以上いた職人は、2025年現在、組合に加盟する木地師・塗師を合わせても18人となりました。さらに近年は、原材料となる良質な木材や漆の確保も課題となっています。

高山市は比較的インバウンド客が多く訪れるため、厳しい中でも一定の需要は確保できているのではないかと推察されますが、売上確保や後継者問題は依然頭を抱える大きな問題です。

●伝統を未来へ。官民一体で進める3本柱

このような現状に対し、高山市は「点の支援ではなく、面の支援をしていく必要がある」と認識しています。

①販路開拓 ②技術承継・素材確保 ③後継者育成 の3本柱を立て、官民一体で能動的に課題へアプローチしています。

①販路開拓 では、

市長らによるトップセールスやJNTO（日本政府観光局）と連携した海外販路開拓、英語版PRパンフレットの作成などを実施。今後は海外の展示会への出展なども視野に入れています。

②技術承継・素材確保 では、

引退した職人を招いて「批目」などの消えゆく技術の勉強会を行うほか、飛騨の漆文化を復興・伝承することを目的とした「飛騨漆の森プロジェクト」への補助や、市有林での漆の植栽管理を通じて、国産漆の確保にも努めています。

③後継者育成 では、

全国公募による職人インターンシップへの参加補助や、後継者となる職人への生活資金、道具資金、独立資金の補助といった、直接的な支援も行っています。



飛騨高山 飛騨春慶めぐり

職人の技が息づく、飛騨春慶と出会える場所をご紹介します。飛騨春慶は、木目の美しさをそのまま活かす「透漆（すきうるし）」の技法が特徴です。塗りたての琥珀色は、使い込むほどに色が変化していきます。あなただけの色に育てる楽しみを、ぜひ飛騨高山からお持ち帰りください。お土産としてだけでなく、贈答用にも最適です。

〔有限会社 山田春慶店〕

職人が天然漆の手塗りで仕上げる伝統工芸「飛騨春慶塗」の専門店です。定番の弁当箱、重箱だけでなく、時計、アクセサリーなど他店にはないオリジナル製品が充実しています。伝統と現代が融合した新しい春慶塗に出会えます。



岐阜県高山市大新町1-111
◆櫻山八幡宮から徒歩3分



〔こくわ春慶〕

製造直売ならではの品質と丈夫さが魅力。使い方やお手入れ方法を丁寧に教えてくださるため、初めての方でも安心です。英語でのご説明もあり、海外ゲストのご案内にもおすすめのお店です。



*飛騨春慶連合協同組合
理事長のお店

岐阜県高山市下三之町19 右衛門横町内
◆宮川朝市沿い

〔有限会社 戸沢漆器〕

飛騨春慶の直売店であり、本誌インバウド掲載の熊崎信行氏の作品にも出会うことができます。蒔絵を施した華やかな作品なども並び、春慶塗の多彩な表現とデザインの妙をじっくりと堪能できます。



岐阜県高山市上一之町6番地
◆高山陣屋から徒歩3分



〔飛騨高山まちの博物館〕

城下町の歴史と文化をテーマに、高山の成り立ちを伝える博物館です。飛騨春慶を始めとする飛騨の伝統工芸品を鑑賞することができます。



岐阜県高山市上一之町75
◆古い町並みから徒歩3分

今回ご紹介した以外にも、飛騨春慶に出会えるお店はたくさんあります！
ぜひ実際に手に取って、透き漆の美しさをご自身の目で確かめてみてください。